

# 熱田神宮摂社南新宮社の疫病退散の祭事について —近世江戸期を中心として—

野村 辰美

熱田神宮の摂社南新宮社は、須佐之男命（素戔嗚尊）を祀り、例年6月5日に疫病退散の祭典を行う神社である。同社は神宮境内唯一の丹塗りで、檜皮葺になり、一間社流れ造りの社殿であって、西に向いている（神宮の御社殿の多くは神明造りで、素木で、屋根は銅板葺きである）。そして、同社には末社として曾志茂利社と八王子社の二社がある。

その祭典は、津島神社（愛知県津島市に鎮座）に倣うもので、天王祭ともいう。6月5日の一日を祭典日とし、御芦を社殿に飾り（末社の二社も）、神事を行った後、その御芦を流し、疫病を祓うものである。

近世江戸時代は、この祭典日に併せて熱田八ヶ村（市場・田中・神戸・宿今道〈伝馬〉・大瀬古・中瀬・東脇・須賀）から山車・車楽（だんじり）が引き出される（大山祭）。山車・車楽はこの神社前に勢揃いし、山車（この大きさ高さ30メートルにもなる日本一を誇ったという）にはからくり人形も出て、演目を演じ、また囃子や太鼓も打ち鳴らされた。また山車は町中を引き回すなどして、大層賑やかで圧巻の祭典でもあった（この大山祭については注目を集めその論考は多々ある）。

ところで、近世期の祭典のあり方は現在とは大きく違っていた。まず、5月晦日に鳥居に忌竹をさし、そして致齋（祭りを前にして忌みこもる）に入るからはじまる。その後6月4日に舞楽（遺礼）があり、5日には南新宮社への御神前供御を行い（その際、小麦神酒が供えられる）、その後熱田八ヶ村から山車や車楽が引き出される。それから、6日に南新宮社の裏手にある池に（現在この池はない）、御芦を浸ける御芦流し（御芦祭）が行われる（この御芦を、吉棄物・凶棄物という）。この様に三日以上に亘る祭典であったことが知られる。そこには細かい儀式が行われていた。今回

は江戸時代前期の延宝9年（1681）に成立した、『延宝九年年中行事』群の内に、（イ）『南新宮御祭礼之次第』があり（『熱田神宮史料』年中行事続編他所収）、これに（ロ）『熱田御祭年中行事記』（『熱田神宮史料』年中行事編下巻所収）を補足して概略をした。同社で行われる神事に興味深いものが残されていたのでここに重点を置いて発表を行った。それは以下のようなものである。

（1）5月晦日。忌みこもり、鳥居に忌み竹を挿御国行の禁（6日まで）。（2）熱田町のうち新宮坂の氏子は南新宮社の掃除。境内は同社の管理の社人（磯部氏）が行う。（3）6月4日。舞楽の遺礼あり。祝儀の膳用に小麦酒醸す。御芦を受け取る。（4）5日（祭典当日）。小麦酒を瓶子にいれ供える（小麦を利用するのはこの時期収穫期となることによるものか）。次に祝師（のりとし）田島氏による祝詞奏上がある。田島氏は熱田大宮の権宮司職である。更に楽師若山氏による楽の演奏があり、「袖舞」が演じられる（袖舞は今では行われていなく内容は不明）。（5）6日。社殿裏の池に御芦し流しを行う。なお、この日より8月21日までこの池に毎夜提灯・篝が奉納される。

このように詳細な祭典であったことで、熱田大宮併せて近世江戸時代の南新宮社の「疫病退散」神事が重要な祭りであったことと思う。

近世の熱田神宮の年中行事はその基本は中世室町時代からの引き継ぎと考えている。それは、文明17年（1485）の年紀をもつ『年中行事記』（『張州雜志』巻第49所収、『熱田神宮史料』年中行事編上巻に翻刻掲載）があり、これに「六月五日 供御、新宮御祭、祇園会」とあることを含め、その他の年中祭典の多くを比較してみれば大凡一致するところから窺える。

しかしこの祭典は近代明治時代となり、諸般の理由から、山車や車楽が引き出せなくなり、祭典

も一日だけの神事で終えるようになってかなり変化し、今に至っている。これは、明治4年（1871）5月14日の太政官布告の官社制度の改訂によって、熱田神宮は官幣大社に認定され、祭典も官制となるなど大きな改革が行われた事によるものが一つの理由であろう。更にその太政官布告により、神社の神職は精選した者を充てることとなり、それまでの世襲社家のものが奉仕する事ができなくなったことも関係するであろう。つまり、奉仕する神職の人数が大幅に減少した（社家は400家もあったという。この官符ののちは4、50人という）。現在の熱田神宮の祭典もこれを基準に斎行されている。

以上の事を説明するに当たり、熱田神宮の祭典に関わる史料が比較的多くあり（これら多くの史料は熱田神宮宮庁編刊の『熱田神宮史料』年中行事編上下巻に所収）、近世江戸期の様子もこれらの史料によって垣間見る事ができる。今回の研究発表では、近世江戸期の南新宮社の祭典を中心に見てきた。それは現在とはどういう点が違っているのかをも念頭に置きながら問題の提起にもなれば幸いと考えた。

因みに、この発表に際し研究者の一人から、「御芦を池に流したのちはどうしたのか？」との質問を受けた。その場でははっきりとした返答はできなかった。その後色々調査をしたが説明するには至ってない。

本稿は、研究発表の折の要旨を元としているため詳細を省略していることと、関係資料の掲載をも省略していることをお断りする。

発表の詳細はまつり同好会機関誌の『まつり』83号〈特集愛知の信仰と芸能〉(2021年12月刊)に掲載。

（まつり同好会会員）